

解剖学の先駆者山脇東洋の史跡を訪ねて

中山 清治*

1. はじめに

歴史の町京都はいたるところ史跡で埋め尽くされている。一般の観光では寺社、歴史の舞台となったいわゆる名所旧跡巡りである。医史跡は一般のガイドブックには殆ど記されていない。京都で医院を開業され、永年医史学を研究されてきた杉立義一先生は「京の医史跡探訪」を著しており、この一冊が京都の医史跡を知るうえで重要な資料となっている。そこで、この書を携えて京の医史跡を訪ねている。

山脇東洋の史跡については、およそ10年前に訪れている。このときは京都駅からタクシーで、東洋の墓地がある誓願寺へ向かったが、そのときの運転手は山脇東洋なる人物を全く知らないとのこと。通常、京都観光は歴史の舞台となったところを巡るのが中心であり、医史跡を巡ることは稀とのことであった。

平成21年8月、日本における解剖学の先駆者となった山脇東洋の史跡を再度訪れたので報告をしたい。

今回は京都駅から地下鉄に乗り河原町駅で下車。山脇東洋の墓と解剖供養碑のある新京極の誓願寺からのスタートである。

2. 誓願寺とその周辺の史跡

この誓願寺（中京区新京極三条下ル東入ル）は浄土真宗深草派の本山である。元は油小路通元誓願寺にあったが天正年間（1573～1592）に現在地に移転したものである。近くには角倉了以の拓いた高瀬川があり、島津の歴史博物館、大村益次郎・佐久間象山遭難の場所、坂本龍馬遭難の地等の史跡がある。今回も誓願寺でお参りを済ませて墓地へ向かう。前回、墓地の見学は自由にできたが、今回は管理者が置かれ、許可を得なければ立ち入ることができないようになっていた。出入り口は二階建て日本家屋の風情を生かした建物で、遠くからも目に付くよう「山脇東洋先生の墓」と「安楽庵策伝上人墓所」の表示がある。

この安楽庵策伝上人（1554～1642）とは如何なる人物か。墓地内の案内によれば、浄土宗の高僧で茶人として知られ、「伝承笑話」という著作もあり後世の落語や小話に大きな影響を与えた人といわれ、落語家の元祖にもなっている人物とのことである。また、墓地の周囲は高層のビルに囲まれており、墓地の部分だけが空間をつくっている。正にここ誓願寺の墓地は路地裏の史跡といえる場所である。

*日本鍼灸理療専門学校 〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町20-1 E-mail address : nakayama@hanada.ac.jp



誓願寺墓地の入口



誓願寺墓地の山脇東洋夫妻の墓



山脇社中解剖供養碑

3. 解剖供養碑と東洋の墓

先ず、出入り口からおよそ15メートル進んだところに山脇東洋の墓がある。墓石には屋根が取り付けられており、傍らに駒札が立てられている。墓地は平成6年に再建・改修がなされたものであり、駒札には次のように書かれている。

山脇東洋のヒューマニズム

「山脇東洋（1705～1762）は18世紀の京都が生んだ名医の一人です。1754年（宝暦4年）に日本ではじめて医学の目的で人体の内臓をしらべ「蔵志」を刊行して実証的な科学精神の灯を医学界に点じました。山脇一門はその後も熱心に人体内臓の研究を重ねすぐれた業績をあげ、また解剖供養碑をたてて慰霊しています。この供養碑には男女14名の戒名が刻まれ、東洋の精神を受けついでいます。東洋夫妻の墓碑および解剖供養碑が永年の風雨に曝され傷みがひどくなってまいりましたので今回再建・修理しました。

平成6年9月18日「山脇東洋顕彰会」と記されている。ところが、平成6年以来15年の歳月を経ているため既に駒札の文字は読みにくくなっている。

東洋（夫妻）の墓のすぐ左手の角、3～4メートル離れたところには山脇社中解剖供養碑がある。これも平成6年に改修されたもので墓碑の隣には小さな「墓碑整備記念之碑」も建てられている。ここに刻まれている14名の男女は何れも罪人であり、山脇東洋、東門、東海等によって観臓の対象となった者である。

利剣夢覚信士	剣光利脱信士	剣光涼月信士	利宅祐剣居士	剣室如幻信女
利剣大悟信士	大心受剣信士	利剣浅良信士	剣刃秋声信女	剣室如心信女
剣刃春風信士	剣光向西信士	剣刃朝権信士	剣住利生信女	

このうち、「利剣夢覚信士」は山脇東洋が観臓した罪人「屈嘉（くつよし）」であり、宝暦4年（1754）閏2月7日、西土手刑場で斬首された者の戒名である。「夢覚」とは長い間の医学上の混迷の夢を呼び覚ましてくれたことに対してつけられたという。

また、東洋は観臓から1か月後の3月7日、誓願寺塔頭の随心庵で屈嘉慰霊の法要を営んでいる。

観臓の後、屈嘉の遺体は刑場に埋められたが慰霊に当たり遺骨を掘り起こして火葬し、誓願寺に手厚く葬った。これは今日、医科大学で毎年実施している解剖体慰霊祭に当たるものであり、おそらくこれが日本で最初の慰霊祭となったものと思われる。

東洋は「蔵志」の中で屈嘉について次のように述べている。「夫れ、屈嘉なる者に一面識なし。而して我が党をして千歳の大疑を徴せしむるは豈に非ずや。其のわが道に於けるや大勲ありと謂ふべし。」さらに東洋は「子何ぞ情けを慰める。誠を陳べて薄奠す。尚はくば饗けよ。」と屈嘉に感謝を捧げている。

ここで、この山脇東洋の墓地について触れておかななくてはならないことがある。実際、ここに葬られているのは2代目の玄脩と5代目の東海の次男で28歳で亡くなった玄坤の2人とその夫人だけで、東洋夫妻は伏見区深草の真宗院山脇家の墓地に葬られている。誓願寺に墓がつくられたその理由は真宗院が遠方にあるため、東洋没後のお参りの墓が誓願寺につくられたとのことである。また、2代目玄脩の墓が誓願寺にあるのは時の住職と親交があったからといわれている。

次は京阪本線四条駅より、山脇家墓地のある伏見区深草の総本山真宗院へ向かう。深草駅（りゅうこくだいがくまえ）で下車し、疏水を越えてなだらかな坂道を20分程歩くと真宗院に着く（伏見区深草真宗院山町）。静寂につつまれている寺院の境内を過ぎ、墓地は裏手で更に一段と高い斜面につくられている。山脇家歴代の墓所は左手前で分かりやすい場所にある。墓碑銘は「養寿院法眼東洋先生之墓」更に「四年申戌 官に請いて斬首死因屍を解く。茲の年八月八日先生病みて卒す。享年五十有八」と記されている。ここは、深草一帯を眼下に見下ろすことができる場所である。

お参りを済ませて次はもと来た坂道を下り、深草駅より四条駅を經由し、河原町駅より阪急大宮駅近くの六角獄舎跡を訪れる。



東洋肖像画
(図説・日本医療文化史より)



深草真宗院東洋の墓

4. 東洋の生い立ちと観臓に至るまで

山脇東洋は宝永二年（1705）12月18日京都の生まれという。父は清水立安で丹波亀山の生まれ、京都に出て山脇玄脩の門に入り、その後町医者として生計を立てていたが、東洋が18歳の時亡くなった。

22歳の時父の師である山脇玄脩に能力を認められて養子となった。養父玄脩は三宅氏の出で山脇玄心(1597~1678)の養子となったが、子供がなかったため東洋が養子となった。山脇玄心は曲直瀬玄朔のもとで医学を修め、禁裏の侍医となり勅命により養寿院の号を賜った名医として知られている。

東洋は名を尚徳、字は玄飛、子樹、通称は道作。号は東洋、移山という。初め李朱医学を修め、享保十二年(1727)玄脩の死後、30歳を過ぎてから古医方の後藤良山に師事し、香月則真、稲生宣義、香川修徳等と共に古医方を唱えた。東洋にとって第一の師は養父の山脇玄脩、第2の師は後藤良山である。

東洋は年を重ねるに従い、五臓六腑説に疑問を持ち、いつか機会があれば人体について実際にこれを自分の目で確かめたいとの願望を抱いていた。師の良山に相談をした結果、人体の解剖は官が禁止しているのでできないが、川瀬の内臓は人間の構造によく似ているから、川瀬を解剖してみてもどうかという指示を得た。良山自身、自分でも川瀬をたびたび解剖しているとのことであつた。東洋は良山の教えに従って川瀬の解剖を実際に行ってみた。しかし、その従来からの疑問を解くことはできなかった。

東洋は中国医学への疑問を「蔵志」の冒頭で次のように書き記している。

「医の古を称する、素問を首と為し、靈樞難經、之に垂ぐと云う。其の五臓六腑、表裏転輸、五行五色、経絡配当を説くもの最も詳と為す。魏晉以降、推尊奉戴して、以て吾が道の宗源と為すも復異論なし。不佞尚徳(東洋)、小少より刀圭の業を修め、職を疾医に奉ず。講究熟読の間、大疑ひそかに萌えす」

古来より異論をさしはさむことなく尊重されてきた古典医学の疑問を解明したいという強い意思がうかがえる。また東洋はパドゥア大学教授ヴェスリング(1598~1649)の解剖書を入手していたこともあり、密かに解剖の機会を待っていたのである。

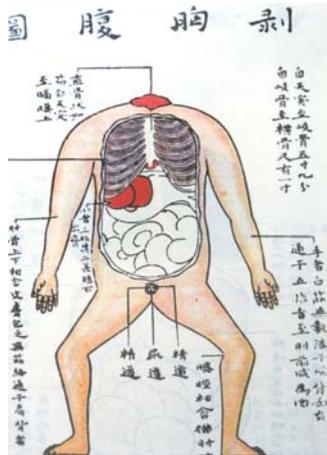
ついにその機会は訪れた。宝暦四年(1754)、東洋49歳のとき、偶然にも38歳の男が処刑されるという情報を得たので、東洋は弟子である小杉玄適と伊藤友信、友人の原松庵の名で京都所司代酒井忠用に解剖の許可願いを提出した。酒井忠用は若狭小浜藩主であり、小杉玄適等は若狭藩医であつた。自藩の医師よりの願い出でもあり、加えて社会的地位の高い3代も続く宮廷医家の名門山脇東洋よりの願い出でもあり、そして請願書の格調高い名文の効用もあって酒井忠用は心を動かされ、聞き入れたものといわれている。

宝暦四年(1754)閏2月7日に斬首となった罪人は5人で、その内4人は首をさらされた後、罪人の穴に投げ込まれたものの、1人は投げ込まれずに残された。この1人が屈嘉という罪人で、人こそ殺していないが詐欺強迫により、人々を恐怖に陥れ金銭を奪うといったかなりの兇悪犯であつたらしい。

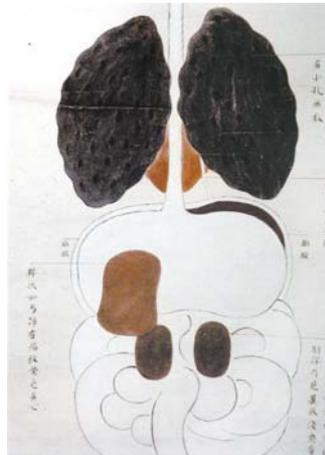
西土手で処刑された後、首のない屈嘉の屍体はもと繋がっていた六角獄舎に戻され、獄舎の前庭に準備された筵の上で屠者によって胸腹部の観臓が行われたという。

現在、この六角獄舎跡は阪急大宮駅・京福四条大宮駅より徒歩で10分のところにある。(中区六角通大宮西入ル因幡町112-4) (財)京都感化保護院で「盟親」と表記されている場所である。この門を

入り左側に観臓の記念碑が建てられている。更にその右側には斬首された幕末の福岡藩士平野国臣の碑も建てられている。記念碑の隣はマンションが建ち並び、付近一帯は静かな住宅街が広がっている。すぐ手前の神社では夏祭りが行われていたが、不思議なことに周囲の静けさに溶け込んでしまいそうな夏祭りであった。



蔵志の中の解剖図



蔵志の中の解剖図



六角獄舎跡解剖記念碑

5. 六角獄舎跡の解剖記念碑について

観臓記念の碑

日本近代医学のあけぼの 山脇東洋観臓之地

1754年・宝暦四年閏2月7日

更に碑文には次のように刻まれている。

近代医学のあけぼの 観臓の記念に

1754年宝暦四年閏2月7日にこの地で日本最初の人体解屍観臓をおこなった

江戸の杉田玄白らの観臓に先立つこと17年前であった

この記録は5年後に「蔵志」としてまとめられた

これが実証的な科学精神を医学にとり入れた成果のはじめで 日本の近代医学がこれからめばえるきっかけとなった

東洋のこの偉業をたたえるとともに 観臓された屈嘉の霊をなぐさめるためにここに碑を建てて記念とする

1976年3月7日

日本医師会 日本医史学会 日本解剖学会 京都府医師会

6. 観臓以後の東洋

人体解剖のパイオニアとなった東洋は解剖から5年後に「蔵志」を刊行した。乾坤の二冊、紙総数82枚、本文6枚、浅沼佐盈の筆による付図4葉、東洋自身の図1枚、巻の初めには儒者梁田蛭巖等の

序文、巻の終わりには嗣子東門の後書きを収めている。

解剖所見が簡単すぎることは東洋も認めており、今後より正確なものが作られることを期待していることも記されている。東洋は解剖に対する批判を考え、蔵志の刊行まで5年間の期間を置いたが、批判と反論は東洋と同派の古医方、吉益東洞からあがった。東洞は「万病一毒論」を提唱し、中国伝来の医学書に自己の臨床的経験を積み上げることに視点を置いた臨床家で、「蔵志」刊行の年に「医断」を刊行し解剖無用論を主張した。

また、東洞より更に厳しく東洋を批判したのは讃岐の医師佐野安貞である。「蔵志」出版の翌年「非蔵志」を刊行し、「夫れ、臓の臓たる形象の謂に非ず。神気を蔵するを以ってなり。神去り、気散じて、蔵ただ虚器、何をもって視聴言動の其の所に随うことを知らん。また、何れを以って榮衛三焦の統紀を見ん……」と強く批判した。医家の中でも解剖反対論は根強いものがあつたが、多くの批判があつても東洋は観臓所見を確信していたので怯むことはなかった。

しかしその東洋も、1762年8月6日鷹司家へ往診に出かけ、昼食としてご馳走になったものが悪かったのか中毒症状を發し、2日後の8月8日朝亡くなった。享年58歳。遺骸は山脇家の菩提寺である真宗院墓地に葬られたという。

ヨーロッパではベサリウスの解剖書が出版されたのが1543年である。観臓から17年後、解体新書の翻訳がなされ、更に日本の医学教育の中で解剖学が医師教育の中に取り入れられるようになったのは1857年、長崎に来日したポンペからといわれている。実にヨーロッパの国々に遅れること300年以上となる。日本における解剖学の源流は観臓を行った山脇東洋にある。この偉大な先駆者の足跡をあらためて辿り、医学発展の礎となった250年の歴史を振り返った。

<参考文献>

解剖事始 山脇東洋の人と思想	岡本 喬	同成社	1998年
医学の歴史	小川 鼎三	中公新書	1964年
江戸解剖始末記	林 太郎	東銀座出版社	1997年
日本解剖学会100年史		日本解剖学会	1995年
日本史小百科 医学	服部 敏良	近藤出版社	1985年
日経メディカル臨時増刊号 25-6			1992年
京医師の歴史	森谷 尅久	講談社	1978年
京の医史跡探訪	杉立 義一	思文閣出版	1984年
安楽庵策伝和尚の生涯	関山 和夫	法蔵館	1990年
日本の医史跡20選		バイエル薬品	1991年
京都新聞・記事 京・近江歴史まわり舞台			2000年9月10日
図説・日本医療文化史	宗田 一	思文閣出版	1989年
復刻 日本科学古典全書3(第八卷)	三枝博音 編纂	朝日新聞社	1978年